

荻生徂徠の言語観

— 『訳文筌蹄』初編と「国会本」の比較から —

武内真弓

はじめに

江戸中期、江戸や上方で現代中国語ブームが起こった。「中国近代語の学習が行われ、また白話小説の翻訳・翻案などをはじめ、唐話⁽¹⁾は江戸時代のことばの一層をなした」（岡田袈裟男『江戸異言語接触（第2版）』笠間書院、2008年、34頁）のである。そのブームの立役者のひとりが、『通俗忠義水滸伝』（宝暦7〔1757〕年—寛政2〔1790〕年）などを著した岡島冠山（延宝2〔1674〕年—享保13〔1728〕年）である。そして、一介の唐通事（中国語通訳）であった冠山を自らの中国語学習サークル「訳社」に講師として招き、その名を高めたのが、当時に著名な儒者であった荻生徂徠（寛文6〔1666〕—享保13〔1728〕年）であった。石崎又造『近世日本における支那俗語文学史』（弘文堂書房、1943年）は「従来西陲の一隅に限られてゐた唐話学は徂徠の如き偉大な学者の賛同と長崎出身の冠山及大潮（稿者注：釈大潮）等の指導を得て始めて学界の注目する所となつた」（9頁）とする。「訳社」で教科書として編纂されたとされる『唐話纂要』などの書籍は「唐話」の教科書として広く巷に出回った。稿者は江戸時代における「唐話」、つまり当時の現代中国語の受容を研究するなかで、荻生徂徠の言語観において当時の現代中国語がどのような位置を占めたか、また逆に、当時の現代中国語を学習することが徂徠の言語観を形成する上でどのような役割を果たしたのかを検討している。本稿では徂徠の著作『やくぶんせんてい訳文筌蹄』からその一端を探ってみたい。

一 『訳文筌蹄』について

荻生徂徠の初期の主張に、和訓に頼らずに漢文を読むという、いわゆる「漢文直読論」がある。その主張を託した書物のひとつが『訳文筌蹄』とよばれる著作である。初編と後編に分かれており、初編 6 巻 6 冊は正徳 4-5（1714-15）年、後編 3 巻 3 冊は寛政 8（1796）年に刊行された。現在『訳文筌蹄』と呼ばれる著作は、この初編と後編を合わせたものを指す⁽²⁾。本稿では、初編・後編両者を合わせて呼ぶ場合には『訳文筌蹄』、分ける場合にはそれぞれ「初編」・「後編」と呼ぶ。

『訳文筌蹄』は初編の冒頭に「題言十則」「訳準一則」「凡例三則」、後編の冒頭に「文理三昧」をおく。本文は、日本人からみて意味の似通った字を 2 字から 28 字のグループにまとめ、それぞれの字について意味や用法を解説している。「訳文筌蹄初編」（『荻生徂徠全集』2、みすず書房、1974 年）戸川芳郎・神田信夫「解題・凡例」は「初編」についてこのように解説する。

本文は、形状字（半虚字）と作用字（虚字）、つまりいまの形容詞（副詞的機能を含む）と動詞、に当たる一六七五個の漢字を標出し、意味の似かようものを類別し、従来のきめの粗い「和訓」ではおなじ日本語のよみとなるものが、中国語の本来としては差違のあるのを、新「訳」すなわち平易な日本語によって辨別し説解した。この、用言に関する同訓異義辞典は、明代に盛んとなった中国での助詞の字書類とは異なり、品詞を自覚したうえで、中国語の読解と作文に最重要な動詞・形容詞の語義を、すでに「和訓」によっては誤読の低迷を免れないことを説きつつ、確実な日本語「訳」によって明晰に疎通したことにより、画期的な内容の辞書となった。同類書の双璧、伊藤東涯の『操觚字

訣』が写本で伝わって、おくれて明治年間に刊行されるまでは、独りその名を擅にしたのである。⁽³⁾ (736頁)

「初編」は「画期的な内容の辞書」として巷に流行したわけである。ここに書かれているのは「初編」についてであるが、「後編」は寛政8(1796)年に発刊された際に「初編」とセットにして販売された⁽⁴⁾。後に「初編」の索引として『訳文筌蹄字引』(明和6(1769)年8月跋)がつくられ、これも「『訳筌』の普及を知る一資料」(「訳文筌蹄字引」〔『漢語文典叢書3』汲古書院、1979年〕戸川芳郎「解題」)となっている。『訳文筌蹄字引』の見返しに「方今海内学士莫不手訳筌也。」(今や国内の学習者には、訳筌を手にしな^{ざつもんせん}い者はいない。)⁽⁵⁾とある。さらに、江戸後期に『訳文筌蹄』をもじって『雑文穿袋^{たい}』⁽⁶⁾なる洒落本が出たことも、『訳文筌蹄』の社会への浸透ぶりを示唆するであろう。

この「初編」冒頭の「題言十則」は、漢文、つまり中国の古典を、和訓を用いず、上から下へとまっすぐ下りるよう(「従頭直下」)読むのが望ましいと述べる。「題言十則」は中国の古典の学習方法について述べているのである。『訳文筌蹄』本体も、当然のことながら中国の古典を学ぶために編まれたことになる。しかし、『訳文筌蹄』には、漢籍の理解とは直接には無関係と思われる、当時の現代中国語の発音らしきものが片仮名で示された箇所がある。これは、どういう目的・理由で施されたものなのだろう。

二 「初編」と「国会本」

「初編」には片仮名で当時の現代中国語の発音を示したと思われる語が32項に46語⁽⁷⁾見出せる⁽⁸⁾。『訳文筌蹄』には、今日『訳文筌蹄』と呼ばれている刊本の他に写本が存在し、そのう

ちの一種が現在国会図書館に所蔵されている（以下、「国会本」⁽⁹⁾ ⁽¹⁰⁾。興味深いのは、この「国会本」の方には、このような、片仮名で当時の中国語の発音を示した語は見当たらない点である。

『訳文筌蹄』は執筆当初から「初編」・「後編」に分かれていたわけではない。『訳文筌蹄』刊行前に、その元となった稿本が存在しており、それが写本として巷間に流布して話題を呼んだ後、刊本『訳文筌蹄』となって世に出されたのである。徂徠本人も『訳文筌蹄』「題言十則」で「此編…(略)…蒙生伝写。無脛走千里外（この書物は…(略)…まだ物事を知らない者がこれを書き写し、書物が勝手に遠くへ飛んで行ってしまったのだ。）と言う。こういった稿本の内容の一部（「国会本」では巻6、7、10、11に相当）を徂徠が取捨選択・加筆訂正して、「初編」（6巻）が徂徠在世の正徳4-5（1714-15）年に刊行された。一方「後編」は、徂徠没後の寛政8（1796）年に、残りの部分の一部に竹里散人なる者が手を加えて出版された。つまり、「初編」と「後編」とは、編纂過程に違いがあったのである。「国会本」がすなわち上に述べた「写本」そのものであるかどうかはわからないが、いずれにせよ、まず「国会本」のような内容の本が写本として広まり、その後内容が取捨選択されて『訳文筌蹄』となったことは間違いないだろう。

「国会本」がいつごろ成立したのかについては、「…(略)…序跋なし、著者名なし、筆者の年記も氏名も缺いて⁽¹¹⁾」おり、定かではない。『訳文筌蹄』「題言」によると、徂徠は父の江戸扨⁽¹²⁾によって14歳から25歳まで⁽¹³⁾南総に移り住み、帰京後の25、6歳の頃に『訳文筌蹄』の内容を弟子に口述筆記させたという⁽¹⁴⁾（『年譜考』では元禄4（1691）年、26歳頃とする）。これに対して黒住真は、「国会本」が質量ともにまとまったものであることから、

徂徠の言語論著の皮切りは、徂徠二六歳くらいであり、相当年月がたったところに「稿本（引用者注：本稿でいう「国会本」。黒住は「国会本」が、護園に残り増補・削除されて『訳文筌蹄』初編となった古い稿本と見なしている）」、また年月がたったところに『初編（引用者注：本稿でいう『訳文筌蹄』初編）』ということである。（「『訳文筌蹄』をめぐる」（『近世日本社会と儒教』ペリカン社、2003年、554頁）

とし、「国会本」の成立を26歳頃から「相当年月がたった」ころであろうとみている。

なお「初編」巻首の「題言十則」は、黒住前掲書によると、「稿本（国会本）」が成立した後に「題言十則」（宝永8〔1711〕年）が書かれ、さらにその後に「初編」（刊行は正徳4-5〔1714-15〕年）の本文が書かれる、という順番で成立した⁽¹⁵⁾。その結果、現在の「国会本」には「題言十則」は存在していない。逆に言うと、現在の「国会本」に「題言十則」が存在しないということは、「国会本」が護園に残っていた古い稿本と非常に近い証拠であると見なせるだろう。また、『訳文筌蹄』「初編」の内容を踏まえて「題言十則」を書いたわけではなく、「題言十則」は、これから稿本に手を加えて完成させる『訳文筌蹄』「初編」の、言わば設計図なのである。なお『訳文筌蹄』の後編については、徂徠の死後に刊行された、徂徠以外の人間の手が入った資料であることから、本稿では考察の対象から外し、別に考えることとしたい。

三 「初編」と「国会本」の違い

「国会本」と『訳文筌蹄』の対応は、黒住前掲書および『漢語文典叢書3』所収の「訳文筌蹄11巻」「解題」に詳しい。内

容の増加も著しく、まず、親字の数が、「国会本」が 640（巻 6：167 字、巻 7：162 字、巻 10：199 字〔二文字語を含む〕、巻 11：112 字）⁽¹⁶⁾であるのに対し、『訳文筌蹄』前編は 1675⁽¹⁷⁾（巻 1：19 項 139 字、巻 2：41 項 297 字⁽¹⁸⁾、巻 3：43 項 298 字⁽¹⁹⁾、巻 4：27 項 212 字⁽²⁰⁾、巻 5：51 項 303 字⁽²¹⁾、巻 6：50 項 426 字⁽²²⁾）であり、大幅な改稿と言って差し支えないであろう。

また、先ほど述べたとおり、「初編」では片仮名で当時の現代中国語の発音を示したと思われる語を使った説明が用いられている。例えば「初編」の本文冒頭の【閑】の項には

【閑】はひまと訳す。又、むだと訳す。「忙」字の反対なり。…(略)…俗語にコンヘン空閑はひまなることなり。貴閑は御ひまといふ詞なり。…(略)…女房の夫にひまをとるは、…(略)…俗語にはギウヒウ求休といふ。ひまをやるはヒウリヤウクアハアタアヒウ休了他把他休なり。主人にひまをとるも求去也。俗語にてはギウトイヤウトイゾエンリヤン求退要退錢糧なり。（初 1-01 ウ）⁽²³⁾

という説明があり、「コンヘン空閑」などと、当時における現代中国語の発音を片仮名の振り仮名で示している。一方、「国会本」の【閑】項（『訳文筌蹄写本』巻 6、『漢語文典叢書』3、汲古書院、1979 年）を、些か長いが、すべて引く。

【閑】しづかるとよむは倭訓の誤りなり。字書に静也と云注あれども、それは静なる気味合もあると云ことにて、的当の字訓にあらず。静は動静と云て、動字と対する字なる故へ、正く、しづかと云訓、的当也。閑は、ひまなと云意也。ひまなと云から、むだとも意得、ゆうなとも意得る。故に、忙字と対する文字也。閑職と云も、ひまな役と云義、閑人は、ひま仁と云義、閑議論と云も、ひまなまのむだ僉議と云義。又、閑々語とも云も、むだことと云。又、閑雅と

云も、ゆうに・きやしやなど云義、幽閑と云も、おくゆかしひ・ゆうなど云義也。又、いたづらと訓ずる説あれども、的当にあらず。(286頁)

このように、「初編」に見られるような「^{ギウヒウ}求休」「^{ヒウリヤウタア}休了他」「^{ハアタアヒウ}把他休」「^{ギウトイ}求退」「^{ヤウトイツエンリヤン}要退錢糧」といった語句を挙げていない。「国会本」にも「俗語」を用いた説明はあるが、片仮名で発音を示した語がないのである。

「国会本」にはなかった、片仮名で発音を示した当時の現代中国語を徂徠が「初編」に加えたことに稿者は注目したい。

「国会本」から「初編」への間に、徂徠にとって「俗語」に対する何らかの心境の変化があったと考えられるのではないだろうか。徂徠は「題言十則」執筆と同じ年の正徳元(1711)年にはすでに「訳社」で「音声言語としての現代中国語」の勉強会を始めていた。「^{ギヤンツアツコウ}強似阿哥」「^{リンワイチヤイジンキユウ}另外差人去」などの語句は、管見の及ぶ限りでは白話小説の中に見出せないことから、「訳社」などの場で習い覚えた可能性を指摘できるかもしれない。当時の現代中国語音を表した語の数量そのものは、「初編」全体の親字の数が1675であることからすると、決して多くはない。

一方「国会本」の解説を見てみると、「俗語」の語でさまざまな説明の仕方をしていることがわかる。

【些】ずんど少なき意なり。「ちくと」と云ほどの義。俗語なり。(300頁)

【欺】…(略)…又人をあなどることをも欺と使ふことあり。俗語にあることなり。…(略)…(342頁)

ここでは「些」「欺」字の俗語における使い方を解説してい

る。

【慰】なぐさむるとよむ。俗語のあそびなぐさむことにてはなし。人のかなしみ、又はをそれ・いかりなどするをなごめることなり。又、心の安堵することにも用ふ。心を慰す意なり。熨は、熨斗にて物をのして、しつとりとさするなり。(315頁)

「なぐさむるとよむ。俗語のあそびなぐさむことにてはなし」という説明は、日本のことばでいう「あそびなぐさむ」という意味ではなく「なぐさむる」という意味だ、ということを言っているようである。つまり、ここでの「俗語」は、他の例と違って日本語の俗語を指しているのではないかと思われる。これは、あるいは「国会本」の段階では、「俗語」という語の用法に揺れがあったことを示すのかもしれない。

【念】又、口念と云ときは口にて唱ふること之。一誦、一仏などを思ふとばかり意得て様々理を付て云は、文字の正義ばかりを意得て俗語を知らぬ故なり。(338頁)

「俗語を知らぬ故なり」という言説には、俗語を知ることの優位性が背後にあるだろう。このように、「国会本」において「俗語」の語で説明されている内容が多様であることが見てとれる。

これと同じように、「初編」にも「俗語」という語を発音表記なしの語とともに用いている例がみられる。「初編」に「俗語」の語を用いて音声表記なしの語を説明している項は81項あり、音声表記のある語に比べて多い。

【利】…(略)…俗語には、すさまじく甚しきことを利害といふ。…(略)…(初 1-11 オ)

【保】…(略)…俗語に、うけあふことを保といふ。保任と連用す。保戸・保人、皆うけあひものなり。…(略)…(初 1-17 ウ)

「利害」「保任」「保戸」「保人」などの語には発音は示されていないが、現代中国語における用法を示すという点では、音声表記のある語と同様の説明をしているといえよう。

【饒】…(略)…また俗語にゆるすとよむ。(初 1-13 オ)

【停】俗語にひとしとよむ。ものの等分なることなり。…(略)…(初 2-57 ウ)

【派】俗語にわりつくることなり。経済の書に多き語なり。(初 3-06 オ)

【俵】是も俗語にものを分散することなり。(初 3-06 オ)

これらの例は、俗語の語彙を提示することなく、字が俗語の文脈で使用された場合の解釈を示している。

【化】…(略)…又、僧道の募縁を化と云ふ、この方俗語の勸進なり。…(略)…(初 3-10 オ)

ここでは、「『化』は日本語の俗語でいう勸進のことである」という説明をしていると考えられる。つまりこの「俗語」は日本語の俗語のことであるが、「この方俗語」と書いており、通常の「俗語」とは違う意味で用いていることを明示している。先に挙げた「国会本」の、「俗語のあそびなぐさむことにては

なし」の「俗語」が日本語の俗語であるという説明なしに使われているのと対照的であるといえよう。これは、「初編」では徂徠の「俗語」の用法が「国会本」に比べて揺れが少なくなり、字の解釈がより精密になったことを表していると思われるが、これは今後の課題としたい。

「俗語」の他に徂徠が字義の説明に用いているのが、「訓」「訳」などの語である。例えば【正】項にはこのようにある。

【正】ただしと訓ず。ろくなりと訳す。和語のただしきと云は、きびしきやうなる意あるやうなり。ろくなりと見てよきなり。邪の反対なり。正邪はろくとゆがむなり。廉正は無欲にろくなるなり。正直はろくにすぐなるなり。影正は、かげのゆがまぬなり。心正、筆正は、心がろくなれば筆もゆがまぬなり。ただすと訓ずるとき、なほすと訳す。是正文字、釐正、改正などなり。但、ただすとよむとき、人多く糾字のやうに心得るは、毫釐の違ひ千里の謬となるべし。正心と云は、心をゆがまぬやうにするなり。心をろくにするなり。…(略)…(初 4-01 オーウ)

徂徠は【正】を、「ただし」と訓ずるときには「ろくなり」と訳し、「ただす」と訓ずるときには「なほす」と訳せ、という（「ただすとよむとき」という箇所は、「『ただす』と理解するとき」という文脈であると判断するので、ここでは論じない）。ひとつの字義を説明するのに、徂徠が多様な方向からの説明を試みているのがわかる。この【正】字は「国会本」には見当たらないので、「国会本」と「初編」の両方に説明がある語の例を挙げる。【動】字の「国会本」の説明は以下のとおりである。

【動】いごとと訳す。静の反なり。人のいごと・虫のいごと・心のいごとなど、皆是なり。（287頁）

一方、「初編」ではこのように説明している。

【動】うごとといへる訓、更に移易すべからず。静の反なり。義極めて広し。動止は人物・日月・風気までも通用して、動と動きやむとの反対也。書東語には起居のかへ辞になりて御息災なりやと問ふことを起居安穩とも、動止安穩ともいふ。動息は人物に通じて、動くとやすむとの反対なり。動植は人物を動物とし、艸木を植物とす。陶詩に「日入群動息」といふも、動物を指せり。月令に「水泉動」といひ、国語に「土膏其動」といふは、微動する始めをいふ。地震を地動といへるは、動の甚しきをいふ。漢書に「嚴延年之治動、黄次公之治静」といへるは、治めのさはがしきをいふ。皆、義広きゆへ、用処多端なり。されども、うごとと云ふにて明かなり。又、動輒と云ふは、すはともすればと云意なり。曾子「動必求於身」と是なり。俗語の動不動^{ドンボ}は、ぜひにと云ふ意なり。是も動輒より転来れり。正韻に、うごくは上声、うごかすは去声と云へれども、正字通に其誤を辨ぜり。自然・使然に拘はらず、上去両音なり。

（初 1-05 ウー06 オ）

「国会本」・「初編」共に、省略することなくすべてを引用した。「国会本」では「訳」と反義語（静）、用例を示している。一方「初編」は「国会本」の「訳」と用例を除き、代わりに「動止」の説明・書簡語としての用法を挙げる。続いて、陶淵明の詩・『礼記』月令篇・『漢書』・『国語』の用例をそれぞれ挙げて、「微動する始め」とする、などの説明をして「皆、

義広きゆへ、用処多端なり。されども、うごくと云ふにて明かなり」とする。そしてさらに俗語などの説明を加えるなどして、幅広く解説しようとして試みているのがわかる。

もうひとつ、【極】の例を「国会本」・「初編」の順に挙げる。

【極】元来、家のむなぎのこと也。むなぎは家のいきどまりなり。故に、きわめなり。元来、極はきはめ也。窮は、きはまるなり。究は、きはむるなり。研は、するなり。俗の至極と云が合すること、極字・至字と相似たり。至字は、いきつくことなり。動く字なり。極は静かなる字なり。

(307頁)

【極】しごくの義なり。屋極、むなぎと注すれども横れるむなぎに非ず。四方なる堂のむねの宝形なり。故に太極・皇極・立極・南極・北極・民極など、しんばしらと云ふ義にとるべし。太極は一理を云ふ。天地未開・混沌未分を太極と云ふこと、漢儒の陋見なり。皇極は、天子の位は天下のしんばしらなるゆへに云ふなり。立極は、しんばしらを立るなり。南極・北極は天の南北の中心の処を云ふ。又、宸極・御極・紫極・丹極など、禁中の異名なり。四極八極は四方八方のはてなり。老荘の無極もはてなきことを云ふ。使我到此極は、なりのはてなり。張良伝の布衣の極は平人の到下なり。五福六極の極も、はての意なり。その外は多く至極と見るべし。きはむると云ふも、しごくをきはむるなり。極知などは随分しるなり。(初 3-37 オーウ)

「国会本」では「むなぎ」の意から「いきどまり」となり「きわめ」となると説明する。さらに類義語として「究」

「研」および「至」の説明を加えている。一方「初編」では、「国会本」にあった、「むなぎ」の意から「いきどまり」となるという説明を廃して、「しんばしら」の義と解釈するよう変えている。また「太極」の解釈に関して「漢儒の陋見」を指摘する。その他、禁中の語の説明・「四極八極」「無極」などの説明を加えている。

このように、「初編」の説明は「国会本」の説明を取捨選択し、さらに多様な方向の解説を加えて作られているのである。取捨選択というより、質的にも量的にも、ほぼ全面的に改変されているとさえ言えよう。この変化は、それぞれの字に対する徂徠の理解が深まっていることを表し、それによって「国会本」に比べて精密な説明がなされている。徂徠の言語観の変化が、この説明の変化に表れていると考えてよいだろう。

「国会本」と「初編」の説明の違いが、この二つの書物が成立する間に徂徠が会得したものの表れであり、そのうちのひとつが音声言語としての中国語口語であった。音声言語の習得が徂徠の言語観を形成する上でどのような役割を果たしたのか、音声言語への興味によって徂徠の言語観がどのような影響を受けたのか、これについては稿を改めて論じたい。

「国会本」および「初編」の解説を見ると、徂徠がひとつの字にさまざまな意味や用法を示していることがわかる。それらの意味は無関係に存在しているのではなく、ひとつの字義から派生した、言わば枝葉の意味である。逆に言えば、この枝葉の意味を重ね合わせれば、現実に運用されることばの「核」となるものが導き出されるはずである。徂徠はこれを求めて多様な側面からの解説をしたのではないだろうか。俗語の意味もあくまで「核」から派生したものであり、徂徠はそれらも含めてひとつの字義を成していると考えて、「国会本」および「初編」に加えたのであろう。「国会本」と「初編」の内容の差は、こ

の間に徂徠が会得したものの差を表しているのであろう。

俗語の発音表記があることで、学習者が、自らが学んでいるのが日本のことばではなく外国のことばなのだと自覚する助けとなっただろうと想像できる。学習者の知的好奇心を満足させ、彼らに、異国のことばを楽しむという感覚も与えたことであろう。こういった発想は徂徠の目標とした古典理解にとっては関係のないものであり、古典の理解という観点からは、目標を達成しさえすれば必要のないものである。しかし徂徠の言語観においては「俗語」もその字義を表す要素であったのだろう、と稿者は考える。

おわりに

『訳文筌蹄』の「筌蹄」とは、魚や兎などをとるわなのことである。わなを使う目的は魚や兎を捕ることであって、その目的が達成されれば「筌蹄」は不要となる。このような題名をつけられた『訳文筌蹄』であるが、その実この著作は、古典を理解し古代の思想に迫る武器は言葉そのものなのだという、徂徠の活動すべての根幹をなすものであると稿者は考える。徂徠が意図したか否かは不明だが、徂徠を考える上で『訳文筌蹄』は非常に重要な著作であるといえよう。

本稿では筆が及ばなかったが、徂徠の言語観では字義の理解というひとつの目標に向かっていた「訓」「訳」「俗語」などの項目は、徂徠門下の者たちにとってはすべてが必要なものであるとは理解されなかったのではないかと稿者は推測する。徂徠門下の者たちは、徂徠の学問の多様なエッセンスの中から、自分に適合する要素を取捨選択して取り入れたのであり、徂徠のようにさまざまな側面のものをすべて受け入れることはしなかった。徂徠門下に第二の徂徠が現れなかったことも、これの証左となるのではないかと。また、徂徠没後、徂徠が行った「訳

社」の如き活動をする者も絶えた。これは、自ら長崎に留学に行く者も出て来たことから、「訳社」のような活動が不要になったという側面などもあるだろうが、やはり徂徠の発想が継承されなかったという面が大きいのではないかと稿者は考えている。この点についても、今後の課題としたい。

〈注釈〉

- (1) 岡田袈裟男は「一般に近世日本で受容した明・清の口語語彙をいう」と定義（『江戸異言語接触（第2版）』笠間書院 2008年34頁）する。受容が語彙に限定されていたことを示唆するのだろう。
- (2) 小泉秀之助校訂『「訳文筌蹄」附東涯用字格』（須原屋書店、1916年）は『訳文筌蹄』初編・後編を合わせて『訳文筌蹄』と呼んでいる。先行研究もおおむねこれに倣ったかたちとなっている。
- (3) 引用文献の漢字は常用漢字に直した。以下同様。
- (4) みすず書房『荻生徂徠全集』2『訳文筌蹄初編』「解題・凡例」733頁。
- (5) 本稿の現代日本語訳について、特に記さない場合は稿者訳。以下同様。
- (6) 朱楽館主人の作。刊年不明。安永8（1779）年の自叙あり。序題に「雑もんせん袋」とある。
- (7) 具体的には以下のとおりである（重複する語もある）。

【閑】（初 1-1 ウ） ギウヒウ 求休 ヒウリヤウタア 休了他 ヘアタアヒウ 把他休 ギウトイ 求退 ヤウトイゾエンリヤン 要退錢糧

【静】（初 1-3 ウ） レンヂン 冷靜

【動】（初 1-6 オ） ドンボドン 動不動

【騒】（初 1-7 ウ） ホンサウ 風騒

【速】（初 1-8 ウ） ソヒヤン 速香

荻生徂徠の言語観

- 【綽】（初 1-12 オ）^{チョアーウ} 綽号
- 【強】（初 1-22 オ）^{ギヤンツアツコウ} 強似阿哥
- 【叵】（初 1-22 ウ）^{ホナイ} 叵耐
- 【善】（初 1-31 ウ）^{スウ} 是
- 【好】（初 1-31 ウ）^{ハウダイ ジ ウ} 好歹 肉好
- 【歹】（初 1-36 オ）^{ハウトンスイ タイトンスイ} 好東西 歹東西
- 【粧】（初 2-04 オ）^{チャンバン チャンバン} 粧扮 装扮
- 【装】（初 2-04 ウ）^{タアバン チャンバン} 打扮 装扮
- 【文】（初 2-08 オ）^{スウエン} 斯文
- 【明】（初 2-11 オ）^{エリヤン} 月亮
- 【暗】（初 2-14 オ）^{ボイ} 背
- 【浄】（初 2-26 オ）^{カンヂン} 乾淨
- 【精】（初 2-31 オ）^{ジンチンテ} 成精的
- 【審】（初 2-32 オ）^{ケヒイサウヤン} 隔靴搔痒
- 【緊】（初 2-38 オ）^{ボヤウキン} 不要緊
- 【当】（初 2-67 ウ）^{ホカントン} 不敢当
- 【別】（初 3-01 ウ）^{リンワイハーウ リンワイチヤイジンキユウ} 另外好 另外差人去
- 【特】（初 3-02 ウ）^{ナンテ} 難得
- 【化】（初 3-10 ウ）^{ハアハア} 化化
- 【疊】（初 3-27 オ）^{デキイライ} 疊起来
- 【行】（初 3-40 ウ）^{ハンデウ ドハンビハン コツジウハン キンヂハン ザイハン} 行頭 段匹行 果子行 金汁行 在行
- 【害】（初 3-45 ウ）^{ハイピン} 害病
- 【憚】（初 6-21 オ）^{ウウギイタン} 無忌憚
- 【猜】（初 6-22 オ）^{チヤイイチヤイ} 猜一猜
- 【恨】（初 6-22 ウ）^{ヘン} 恨
- 【驚】（初 6-33 オ）^{キキンリヤウ キリヤウイキン} 喫驚了 喫了一驚
- 【頑】（初 6-40 ウ）^{ワンシャア} 頑耍

(8) これらの語は必ずしも明・清に発生した口語語彙であるとは限らない。たとえば【好】（初 1-31 ウ）の項の「肉好」（「楽の音

うるはしく宛転するなり」）は、『礼記』楽記に「寛裕肉好順成和動之音作、而民慈愛。」（寛裕肉好 順成和動の音 作りて、民慈愛なり。）とある。その他、「求退」（【閑】）は『列子』など、「無忌憚」（【憚】）は『中庸』などに見られる。

- (9) 『漢語文典叢書』3に「訳文筌蹄写本」として所収。
- (10) 『訳文筌蹄』成立の事情については、黒住真「訳文筌蹄をめぐって」（『近世日本社会と儒教』ペリかん社、2003年所収）に拠った。また、みすず書房『荻生徂徠全集』2「解題・凡例」の「訳文筌蹄後編異本」に「異本と認められた書本」として3本を掲載している（761頁）。
- (11) 戸川芳郎「解題」（「訳文筌蹄初編」『漢語文典叢書3』）13頁。
- (12) 平石直昭『荻生徂徠年譜考』（平凡社、1984年）171頁。
- (13) 諸説ある。本稿は平石前掲書に拠った。
- (14) 『訳文筌蹄』「題言」に「此編予二十五六時所口説。僧天教。及吉臣哉。筆受成帙。」（この書物は私が25、6歳のころ口頭で話したのを、僧天教と吉臣哉が書き取ったもので、けっこうな量になった。）（『荻生徂徠全集』23頁）とある。
- (15) 黒住前掲書 pp. 556-557。
- (16) 各巻の「目次」に示された字数。
- (17) 『訳文筌蹄初編』（『荻生徂徠全集』2）「解題・凡例」737頁に拠った。
- (18) 「『皦』一無目有字」（同前）
- (19) 「『已』一有目無字」（同前）
- (20) 「『暢』一無目有字」（同前）
- (21) 「『霑』一（目次より脱落）」（同前）
- (22) 「『貪・婪・饕・耽』『疑・貳・猜・訝・怪』一（目次より脱落）」（同前）
- (23) 『訳文筌蹄』初編の原文は漢字と片仮名で書かれている。本稿

では親字を【】に入れ、漢字を常用漢字に直し、片仮名と合略仮名を平仮名に直し、句読点を施すなどして読みやすくした。また、当時の現代中国語の読みを表しているもの以外の振り仮名と、その他の訓点は省略した。（）内の「初」は「初編」、数字は巻数と丁数を表す。「国会本」も同様。（）内に『漢語文典叢書』3の掲載頁を示した。